



特集

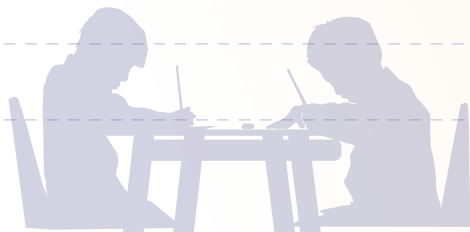
「小5統一合判」5

中学入試レポート vol.

いよいよスタートした2017年入試。 これから1年間の受験 準備と学校選びのために！

早いもので、1月もすでに半ばを過ぎ、いよいよ2017年入試も本番を迎えました。そして5年生の皆さんは、これから新6年生として本格的な受験勉強に取り組んでいくことになります。そこで、気分も新たに、これからの1年間の確かな学習と受験準備に取り組んでいけるよう、この2017年の入試状況をしっかり見つめ、親子でもう一度「さあ、がんばるぞ!」という気持ちを固めていただきたいと思います。

お子さんたちが来春2018年の中学入試を経て、それぞれ進学した中高一貫校から大学入試に挑む2024年には、すでに大学入試のあり方が大きく変化していることが予想されます。これらの動きも見据えて、わが子にとっての最良の教育環境をもう一度考えてみてください。



首都圏模試センター

2017年入試で志望校に挑んでいく、 先輩受験生の姿に多くを学ぼう！

年が明けて2017年の2月も目前に迫り、現6年生の受験生たちは、最後のがんばりをみせています。

首都圏模試の小5「統一合判」も今回が最終回。次の機会は4月16日（日）の小6「統一合判」の第1回になります。これからが来春の入試に挑む現小学5年生にとっての“勝負の1年”です。同時に、いま実際に2017年入試に挑もうとしている現6年生の親子の姿は、来年の志望校合格のために非常に多くのことを学びとる機会となります。これからの1ヶ月の間は、この2017年入試の状況をじっくりと見定めてほしいと思います。

これまでも入試の風景や心構えについては、塾の保護者会や学校説明会などを通じて、ご理解されている方も多いと思います。しかし、これから半月の間は、まさに現実の（悲喜こもごもの）ドラマが、身近なところで繰り広げられるのです。なにも実際の入試風景を見学する必要はありません。入試に関わるすべてのことに耳を傾け、意識を向けることで、2017年の入試状況を肌で感じ、そこから来春2018年入試に向けての貴重な教訓や“合格へのヒント”を得ることができるのです。そのためにも、中学入試に関する情報や、首都圏模試センターのWebサイトで日々更新される「倍率速報」（1月6日からスタート）などにも注目することで、この2017年入試をリアルに感じてみてください。

入試直後には、各塾が入試情報を収集、分析して発表する「入試報告会」や「入試研究会」などに参加するのもひとつの手です。そこでは各校の入試状況（競争率や応募者数、合格最低点、入試問題傾向など）が明らかにされるので、現実の入試が「どのようなものか」をつかむうえでの参考になります。まず、これらの情報を得ることが、翌春2018年入試

に向けての第1歩と考えてください。

現実の入試の結果には、 合格もあり、また不合格もある…。

このレポートを初めて目にさせていただく1月15日以前には、すでに茨城や埼玉エリアで入試がスタート、続いて1月20日からは、千葉エリアの入試の幕開けとなります。たとえば幕張メッセの大フロアを会場に、毎年約2800名規模の入試を実施する◎市川中入試風景は、毎年大きな注目を集めます。この様子を目にするだけでも、来年の入試に向けて気持ちが引き締まるのではないのでしょうか。また同じ1月20日からは、東京都内の私学で願書の受け付けが一斉に開始されます。

この時期、こうしたことをお子さまと話題にして「入試はこんなふうに行われるんだね」と親子で想像してみるだけでも、1年後の入試がぐんとリアルに感じられます。さらにそのことが、お子さまにとって、良い刺激となり、励みになってくるのです。

そして半月後の2月1日。いよいよ首都圏入試のメインステージの幕が切って落とされます。この日の朝、現6年生の受験生はこれまで培ってきた力を武器に、それぞれの志望校の入試問題と正面から向き合うこととなります。



男子御三家の一角、麻布中学の入試風景。創立以来の「自由闊達」の校風は今でも健在です。



この直前、試験教室に向けて吸い込まれていくわが子の後ろ姿を見守る多くの保護者は、ただひたすらに「どうか十分に力が発揮できますように…」と祈るのです。そして、自分の足で試験会場に向かうわが子の姿に、同時に頼もしさや成長の喜びを感じます。「今日までがんばってきて偉かったね」、「悔いの残らないようがんばっておいで」…と。

そして入試が終わると、やがて合格発表。この数年で、入試当日の合格発表を行う学校が非常に増えたことで、早くも2月1日の夕刻から、合格の喜びと不合格の悔しさが交錯します。そこには合格の笑顔の影に、不合格の現実を噛み締めて帰路につく親子の姿があります。

こうした入試の現実を、1年後には自分が立ち向かう舞台として真剣に観察すると、そこには果敢に入試に挑み、その結果を正面から受けとめようとする先輩受験生親子の姿があります。その重みは、見ているものに、何か大切なものを感じさせてくれるはずです。

この1年の歩みが、良い経験になるよう、悔いのない準備を重ねていこう！

入試が“選抜の場”である以上、そこには合格と不合格という二つの現実が待ち受けています。つまり、ほとんどの受験生と保護者が、合格と不合格の両方を経験することになるのです。受験した学校すべてに合格するという幸運なケースは、ほんのひと握りと理解しておくべきでしょう。

そこで大事になるのが、こうした結果をその都度どのように受け止め、それを「良い受験体験」として生かすかということです。来年のそのとき、合格も不合格も合わせて、「実り多い受験体験だった」と思えるように、この1年間の歩みをしっかりと計画し、悔いのない準備を進めてください。

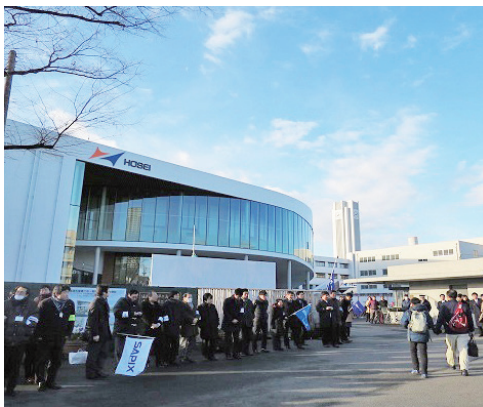
もちろん、いまはなるべく目標を高く持って、各自の第1志望校の合格をめざして努力する“強い気持ち”が必要です。

しかし、中学受験を通して得られる大切なものは、必ずしも第1志望校への合格だけではありません。これから1年かけて、幅広く受験校を探していけば、めざす第1志望校と遜色のない、あるいは別の魅力や特色を持った、価値ある併願校が必ず見つかるはず

です。そういう「第2、第3の選択」を、保護者の広い視野で選んであげることが、お子さまにしてあげられる力強い受験サポートにつながります。

中学受験は志望校への“合格”だけが、目的ではありません。目標にチャレンジすることや、そのために努力していくことを通して、お子さまが強く、遅く成長していくことと、その姿を見ながら、親がわが子にぴったりと併走してサポートしてあげられることが、中学受験の大きな意義でもあります。それは中学受験を実際に経験した多くの保護者からも経験談として語られていることです。

このようにわが子の中学受験と、そこまでのプロセスを価値あるものとして理解し、受けとめることができれば、入試でも必ず満足できる結果が得られるはず



2016年より共学化した法政大学第二中学の入試風景。2018年入試でも高い人気となることが予想されます。

子ども納得できる併願校に合格して進学したケースでは、ほとんどの保護者が「良い学校に進学させてあげることができてよかった」と、その受験体験を懐かしく語ってくれます。

これが「受かった学校がその子にとっての一流校」と言われる理由でもあるのです。

親子でそういう「中学受験ならではの」価値ある体験ができて、わが子が楽しく充実した中高6年間を過ごすことができれば、保護者として、これに勝る喜びはありません。中学受験は「親子の二人三脚で挑める」最初で最後の受験チャンス。親がリードする小学校受験や、本人が主体の高校受験とは違った達成感や充実感が得られるのが、中学受験の魅力なのです。

日本の教育の転換期を迎えた2018年入試は、「21世紀型の」教育観・学力観が焦点に！

そして、これからほぼ1年後に現5年生が挑む2018年首都圏中学入試は、大きな転換期の最中に迎えることとなります。前回のレポートでは、わが子が来年の春、中学に入学して、中高の6年間を経て大学や大学院を卒業して社会に出る2028年以降の世の中がどのような状況になるのかについて触れました。

そこで米国のキャシー・デビッドソン教授による「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」という予測や、英国のオックスフォード大学で人工知能などの研究を手がけているマイケル・A・オズボーン氏による「今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い」という予測を紹介し、近い将来、AI（人工知能）の急速な進化によって、いまの社会に存在する約半数の職業が機械化される可能性が高いという、近未来の社会の



もはや中学入試全体の風物詩となった市川中学の幕張メッセ入試。そのスケールには圧倒されます。

予測を紹介しました。

その後、先のオズボーン氏と共同研究を進めてきた野村総合研究所から、この可能性を日本にあてはめて試算した「10～20年後に、日本の労働人口の約49%が、技術的には人工知能で代替可能に」という推計結果も公表されました。先の英国での発表より2ポイント上昇している点も見逃せません。

いま、「2020年大学入試改革」に象徴される日本の大学入試と教育の変化に対して、大学・高校教員と受験関係者の間では、いまま賛否両論の議論が続けられています。

しかし、その大きな変化の最初の時期に直面する現在の小学生の保護者の意識は、その「2020年大学入試改革」だけではなく、すでにその先の未来を見つめているのです。

だからこそ、近年、◎三田国際学園や◎開智日本橋学園などに代表される「21世紀型教育」推進校や、●富士見丘、◎順天、●佼成学園女子、●昭和女子大学附属昭和などの「SGH（スーパーグローバルハイスクール）」指定校、さらに●大妻中野、●東洋英和女学院、◎湘南学園などの「SGHアソシエイト」校などに注目が集まるのです。

また2016年から青山学院大学の系属校となり、横浜英和女学院から校名を変更した●青山学院横浜英和中学高等学校が、現小5のお子さまが中学入試に



日本の教育が大きな転機を迎えた現在、2018年には新たな“中学受験ブーム”が拡大！

～ 2015年から再び上向いた中学入試が、2018年入試では新たな市場の拡大へ！～

私学と公立の学校が激しく変化するなかで、より良い進学先を探し出そう！

すでにこの1月上旬から本格的な火蓋を切った2017年の首都圏中学入試。とくに入試前半戦の1月入試は、この2～3年の傾向を受け継ぐ形で、たいへんな盛り上がりを見せることが予想されます。

あとのページのコラムにも紹介したように、この10数年間の新たな私立中高一貫校・公立中高一貫校の誕生や改革の動きは、非常に目まぐるしいものがあります。この間、大学付属・系列校では、大きな改革の動きが相次ぎ、これと対抗するかのようになり、系列・併設の大学を持たない中高一貫の進学校でも、自校の教育プログラムや学びのスタイルを進化させる教育改革・入試改革を推し進めてきました。

そして公立中高一貫校でも今春2017年の、横浜サイエンスフロンティアの開校に続き、2019年にはさいたま市立大宮西高等学校を母体とする、新たな公立中高一貫校の開校が予定されています。そうした動きの相乗効果により、来春2018年の首都圏中学入試の情勢にもまた大きな変化が生まれることは必至でしょう。

近年、マスコミ報道でも盛んに取り上げられるようになった「2020年大学入試改革」は、現在の小学生のお子さんが嫌でも直面する問題。それだけに、多くの私立中高一貫校はこうした転機に、自らの教育をさらに充実・発展させていこうと自助努力をすることで、再び受験生と保護

者の注目を集めることが予想されます。こうした私学の動きが、再び中学受験を活性化する起爆剤となるのです。

現段階でいえることは、現5年生のお子さんが挑む来春2018年の中学入試は、また新たな熱気や受験規模のもとで、再び受験率が高まることが予想されます。

つまり、このレポートに記したような日本の教育の大きな変化をはじめ、新たな教育をめざす私学の人気増加や、多様な選択肢の広がりが、潜在的な受験者層を新たに発掘し、わが子を2018年入試にチャレンジさせようとする家庭が、さらに増加に向かう可能性があります。

そういう意味で、おさま方が挑戦する再来年2018年の中学入試では、なおさら「価値ある合格」のチャンスが広がってくると考えてよいでしょう。



東京の公立一貫校の中でも人気、実力ともに高い支持を集める小石川中等教育学校の入試風景。

挑む来春から男子の募集を開始し、共学校となります。青山学院大学との提携を期に人気が発火した同校ですが、共学化元年にあたる2018年入試では、さらなる人気上昇が予想されます。

こうした私立大学の付属・系列校の動きも、日本の教育が変わろうとしているいまだからこそ、より個性化・進化しようとしているのです。

また、文部科学省が大学だけでなく小・中・高でも導入を推進しようとしている「アクティブラーニング」も、現在それぞれの教育現場で急速に浸透しています。

現行の「大学入試センター試験」に替わって、2020年から導入される新テスト「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、これからの大学教育を

受けるために必要な能力を測るためのものです。

それは年に複数回の実施と、CBT方式での実施を前提に開発され、教科・科目の枠を超えた思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせる出題が予定されています。さらに「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を実現するための力を評価する、PISA型の問題を想定」とされていました。

こうした新たな大学入試制度が導入される目的は、この先の世界、社会で生きていくために求められる課題発見・問題解決の力を育てるためであり、そのベースにある理念は、従来の高校教育や大学入試（＝日本の教育）で重視されてきた知識修得型の学力

5年生の学習を乗り切ったことを自信に、6年生の学習リズムを上手につくっていこう！

～テストでつまずいたときには、5年生の教材を振り返って確認しよう！～

受験勉強のひとつのヤマ場は5年生。 その時期を乗り越えたことに自信を持とう！

すでに2017年の中学入試も1月初旬からの茨城エリアなどを皮切りに、1月10日からの埼玉入試も始まりました。さらに1月20日からの千葉入試も目前に迫り、2017年入試もいよいよ最初のヤマ場を迎えようとしています。

現5年生のお子さまたちが入試を迎える来春2018年入試までは、ちょうど1年と少し。それゆえ、ほとんどの進学塾では、この2月からの1年間を新6年生の新年度と位置づけています。つまり、数週間後には、来春の入試本番に向けた本格的な学習が始まることになります。これまで上手にリズムをつくってこられたお子さまは、このまま気を抜かず次ステップに進んでください。逆にこれまでいまひとつ波に乗り切れなかったお子さまは、この期を節目に、心機一転、いいリズムをつくる契機としてください。

この先の受験勉強を決して怖がることも、焦る必要もありません。進学塾のカリキュラムは、6年生の夏休み前までにひと通りの範囲を終えるのが一般的で、夏前の一時期と、その後の夏休みが最大の“ヤマ場”だといわれています。しかし、実はそれ以前に新6年生の皆さんは、すでに受験勉強の大きな“ヤマ場”である5年生の時期を立派に乗り切ってきたのです。

3年生の後半や、4年生のはじめから受験勉強に取り組んできたお子さんでも、5年生のはじめのころは、急速に覚えることが増え、吸収するのが大変だったのではないのでしょうか。ましてや5年生から受験勉強をはじめたケースではなおさらです。

つまり、ここまで努力を重ねてきたお子さん方は、たとえ個々にはさまざまな課題が残されているとしても、「これまでよくがんばってきた」という自信を持っていいのです。そしてその自信とともに、昨年7月から5回の「統一合判」で確かめることのできた課題を胸に刻み、このあとのステップを堂々と踏み出してほしいのです。

5年生で学んだことをときに振り返り、 6年生での学力アップのステップに！

そして、これからの1年間の本格的な受験勉強をうまく消化・吸収していくうえでのコツは、ところどころで5年生のときに学んだことを振り返り、それを確実なものにして、6年生の学習での課題に生かしていくことになります。中学受験の世界では、よく「困ったときには5年のときにやったことを振り返れ」といわれます。しかし、順調に学習を進められているときにも「5年生の学習の振り返り」は有効です。

どの塾でも、あるいは市販教材でも、中学受験のためのカリキュラムは、各教科とも多かれ少なかれ、学年をまたがった「スパイラル（螺旋型）構造」になっています。

これまでにお子さま方が学んできたことは、今後、形や切り口を変えて、入試までに2度～3度と目にするようになります。そのときどきの自分の消化度合いに応じて、5年生までに学んだことを振り返る。その知識を確実なものにしつつ、応用力・思考力を伸ばしていくことが、これから迎える6年生の学習の大きなポイントとなるのです。

6年の学習で
カベにぶつかった時には、
5年の学習の「振り返り」
が有効だよ！



観、教育観を大きく変えてしまうものでもあります。「日本語IBプログラム」やアクティブ・ラーニングの導入推進の背景にも、こうした考え方があるのです。

そうした変化のもとで、たとえば「21世紀型教育」「世界標準の教育」ともいわれる学びのスタイル（IBプログラム、双方向型・対話型、PBL・PIL、ICT授業の導入など）を中高6年間一貫教育のプログラムに取り入れる私学が、来春2018年入試に向けても急速

に増えていくことが予想されます。

こうした教育をめぐる状況の大きな変化のもとで、来春2018年入試で、わが子にとって良い学校を選び出せるように、ぜひ保護者の皆さんには情報収集のアンテナを研ぎ澄ませていただきたいのです。そして同時に、わが子の“合格”への突破口を見出せるよう、いい形で新6年生としての受験準備の歩みをスタートさせてください。



動く！ 変わる！ 増加する公立中高一貫校と「21世紀型」教育を標榜する 私立中高一貫校の動きが入試地図をさらに活性化。

～ 2018年の首都圏中学入試でも、新たな教育を行う私学の変化・進化が人気を左右する！～

●公立中高一貫校の増加を受け 私学VS公立の人気動向はどう変わる？

ここで現小学校5年生のお子さん方が挑む2018年入試の状況を変化させる大きな変動要因について確認しておきたい。

すでに2005年から2016年にかけて、東京都内には計11校、千葉には3校、埼玉には2校、神奈川には4校の公立中高一貫校が新設され、首都圏(1都4県)では計23校の公立中高一貫校が誕生しました。そして2017年には神奈川の横浜市立サイエンスフロンティア、2019年には埼玉にさいたま市立大宮西高等学校を母体とする、中高一貫校が誕生します。

今後はこうした影響で、多くの潜在的受験生層が掘り起こされ、私立中高一貫校を含めた入試地図が変化することが予想されます。

●三田国際学園、開智日本橋学園、かえつ有明、順天、聖学院など「21世紀型教育」を標榜する私学が人気増加へ。

昨春2016年入試では、2015年に共学化した◎東洋大学京北(旧・京北)、◎三田国際学園(旧・戸板)、◎開智日本橋学園(旧・日本橋女学園)の3校が大きな注目を集めました。

そのうち三田国際学園は、リベラルアーツ教育を実践して思考型の学びを追求する本科と、一条校でありながらインターナショナルクラスを併設。インターナショナルクラスでは、ネイティブスピーカーによるイメージ教育を行うなど、アクティブラーニングをすべての授業で取り入れて、独自のグローバル教育を展開しています。

同じく開智日本橋学園は、グローバルリーディングクラス(インターナショナルコース)と、リーディングクラス、アドバンスドクラスを併設。21世紀型学力(探究力・創造力・発信力)を育成するためにアクティブラーニングやイメージ教育を実践しています。この両校は、おそらく2018年にも高い人気が見込まれます。

この背景には、本レポートでも触れた「2020年大学入試改革」への注目があり、今後(2030～2045年)の社会で求め

られる力が大きく変化し、その時代に生きる力を培うために、日本の教育全体が大きく変わる節目を迎えたことへの保護者の意識変化があります。

また、◎かえつ有明では、帰国生の受け入れを積極的に進め、独自の「感性教育」を謳いながら、「IBプログラム」にある「TOK (Theory of Knowledge=知の理論)型」の哲学授業をオールイングリッシュで展開しています。

ほかにも、◎工学院大学附属中の「ハイブリッド・インタークラス」や、●文化学園大学杉並の「ダブルディプロマコース」など、グローバル化を意識したクラス編成を行う私学が増えていくことも、教育の転換期を反映した傾向のひとつと言えるでしょう。

さらに「21世紀型教育」といわれる新しい学びのプログラムをすでに導入～実践する●海城、●立教女学院、●大妻中野、●山脇学園などの人気校をはじめ、●聖学院、◎順天、◎聖徳学園、●東京女子学園、●富士見丘、●八雲学園、●和洋九段女子など「21世紀型教育機構(21st CEO)」校の人気の増加も大いに注目されています。

●山脇学園、大妻中野をはじめ64校が一般入試に英語を導入。2017年入試でも英語入試が増加へ！

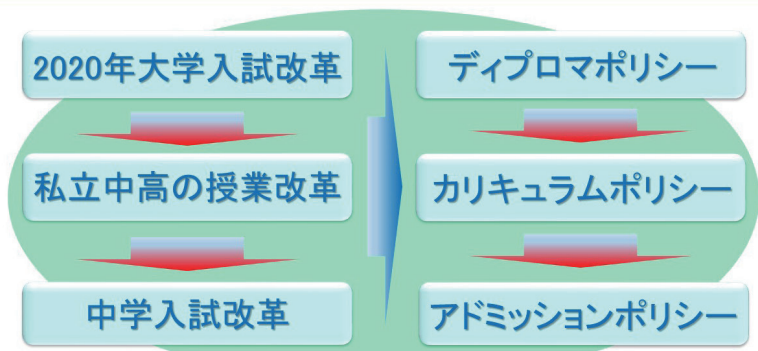
昨春2016年入試では、●山脇学園や●大妻中野などが、中学入試(一般入試)に「英語(選択)入試」を新たに導入し、他の私学も合わせて首都圏で64校が「英語入試」を実施しました。

そして今春2017年入試では、千葉の◎市川や神奈川の●カリタス女子、●清泉女学院などの人気校が、新たに「英語(選択)入試」を導入しました。最終的には計83校(11月末現在調べ)が何らかの形で「英語(選択)入試」を実施することになります。

なかには筆記試験を実施せず、英語での面接やグループワークで受験生の英語力や意欲を評価する私学や、英検取得者への特待生制度を導入する私学も現れ、英語経験者・英語既習者の受け入れの門戸がますます広がっています。

この背景には、「2020年大学入試改革」によって、従来の日本の英語教育の課題とされてきた「聞く・話す」も含めた「英語の4技能」を総合的に評価するために、英検やGTEC-CBT、IELTS、TEAP、TOEFL-iBT、TOEICなど、民間の資格・検定が導入されるという動きの影響があります。

現在の小学校5年生が挑む来春2018年入試でも、中学入試に英語を導入する動きはさらに加速することが予想されます。さらにそのことが中学入試全体の人気動向に与える影響も小さくはないでしょう。



2005～2019年の公立中高一貫校の新設と私立中高一貫校の変化〈抜粋〉

2005年（現・大学卒業2年目の中学受験時）

- ・都立白鷗高等学校附属中学校が開校
- ・東京農業大学第一（共学校）が中学を開校
- ・淑徳与野（女子校）が中学を開校
- ・大宮開成（共学校）が中学を開校
- ・浦和実業学園（共学校）が中学を開校

2006年（現・大学卒業1年目の中学受験時）

- ・都立小石川中等教育学校が開校
- ・都立両国高等学校附属中学校が開校
- ・都立桜修館中等教育学校が開校
- ・千代田区立九段中等教育学校が開校
- ・本庄東（共学校）が中学を新設
- ・白梅学園清修（女子校）が中学を新設
- ・かえつ有明（嘉悦女子）が校地移転、校名変更して共学化
- ・日出学園女子が校名変更し、共学化

2007年（現・大学4年生の中学受験時）

- ・さいたま市立浦和高等学校附属中学校が開校
- ・千葉市立稲毛高等学校附属中学校が開校
- ・法政大学第一（男子校）が共学化し、法政大学中学校と校名変更。三鷹市牟礼に校地移転
- ・宝仙学園（女子校）が中高一貫の共学部「理数インター」を併設
- ・順心女子学園（女子校）が広尾学園と校名変更し、共学部を併設
- ・東京学芸大学附属大泉が国際中等教育学校に
- ・横浜富士見丘が校地移転、横浜富士見丘学園中等教育学校に
- ・東海大学付属高輪台が中学を新設

2008年（現・大学3年生の中学受験時）

- ・都立立川国際中等教育学校が開校
- ・都立武蔵高等学校附属中学校が開校
- ・千葉県立千葉中学校が開校
- ・明治大学付属明治（男子校）が共学化。西調布へ校地移転

2009年（現・大学2年生の中学受験時）

- ・神奈川県立相模原中等教育学校が開校
- ・神奈川県立平塚中等教育学校が開校
- ・日本大学藤沢（共学校）が中学を開校
- ・東京農業大学第三（共学校）が中学を開校
- ・目白学園が共学化し、目白研心と校名変更

2010年（現・大学1年生の中学受験時）

- ・都立富士高等学校附属中学校が開校
- ・都立大泉高等学校附属中学校が開校
- ・都立南多摩中等教育学校が開校
- ・都立三鷹中等教育学校が開校
- ・早稲田大学高等学院（男子校）が中学を開校
- ・中央大学附属高校（共学校）が中学を開校
- ・都文館（男子校）が共学化
- ・成立学園（共学校）が中学を開校
- ・昌平（共学校）が中学を開校

2011年（現・高校3年生の中学受験時）

- ・横浜山手女子が中央大学の附属校化。中央大学横浜山手学園に校名変更
- ・横浜国際大学院翠陵が共学化し、校名を横浜翠陵に
- ・目黒学院が共学化
- ・千葉明德（共学校）、二松学舎湘南（現校名は二松学舎大学附属柏）、開智未来（共学校）が中学を開校

2012年（現・高校2年生の中学受験時）

- ・中央大学横浜山手（横浜山手女子）が共学化



2016年の9月に竣工した埼玉栄中学の新校舎。教育環境の充実のため、近年多くの私学で新校舎の建設や拡張工事が進められています。

- ・横浜市立南高等学校附属中学校が開校
- ・八王子学園八王子（共学校）、西武台新座（共学校）が中学を開校

2013年（現・高校1年生の中学受験時）

- ・中央大学横浜山手が横浜市営地下鉄「センター北駅」近くに校地移転。校名を中央大学附属横浜に変更
- ・埼玉県内に、武南（共学校）、東京成徳大学深谷（共学校）、狭山ヶ丘（共学校）、国際学院（共学校）の4校が中学を開校。
- ・茨城県立古河中等教育学校が開校

2014年（現・中学3年生の中学受験時）

- ・川崎市立川崎高等学校附属中学校が開校
- ・安田学園（男子校）、新渡戸文化（女子校）が共学化

2015年（現・中学2年生の中学受験時）

- ・京北（男子校）が白山の新キャンパスに校地移転し、共学化。校名を東洋大学京北に
- ・東洋大学牛久が中学を開校
- ・戸板（女子校）が共学化し、校名を三田国際学園に変更
- ・日本橋女子館（女子校）が共学化し、校名を開智日本橋学園に変更
- ・工学院大学附属がハイブリッドインタークラスを開設
- ・文化学園大学杉並が高校にダブルディプロマコースを開設

2016年（現・中学1年生の中学受験時）

- ・千葉県立東葛飾高等学校附属中学校が開校
- ・法政大学第二（男子校）が共学化
- ・本庄第一（共学校）が中学を開校
- ・横浜英和女学院（女子校）が青山学院大学の系属校となり、校名を青山学院横浜英和（仮称）と変更（→2018年に共学化予定）。

2017年（現・小学6年生の中学受験時）

- ・横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校が開校予定
- ・芝浦工業大学中高が豊洲へキャンパス移転

2018年（現・小学5年生の中学受験時）

- ・青山学院横浜英和が共学化予定

2019年（現・小学4年生の中学受験時）

- ・さいたま市立大宮西高等学校を母体として中高一貫校が開校予定
- ・慶應義塾湘南藤沢中等部が「英語（選択）入試」を導入予定

こうした変化のなかで、公立学校の教育の枠組みがどう変わり、私学の教育がどう進化（深化）していくのかを、しっかりと見極めたいうえで、お子さまの進路を選びとってください。